



論理と計算

第4回  
充足可能性問題

---

担当：尾崎 知伸  
ozaki.tomonobu@nihon-u.ac.jp

## 講義予定

※一部変更（前倒し）になる可能性があります

09/22	01. オリエンテーション と 論理を用いた問題解決の概要
09/29	02. 命題論理：構文・意味・解釈
10/06	03. 命題論理：推論
10/13	04. 命題論理：充足可能性問題
10/20	05. 命題論理：振り返りと演習（課題学習）
10/27	06. 述語論理：構文・意味・解釈
11/03	07. 述語論理：推論 ※文化の日，文理学部授業日
11/10	08. 述語論理：論理プログラムの基礎
11/17	09. 述語論理：論理プログラムの発展
11/24	10. 述語論理：振り返りと演習（課題学習）
12/01	11. 高次推論：発想推論
12/08	12. 高次推論：帰納推論の基礎
12/15	13. 高次推論：帰納推論の発展
12/22	14. 高次推論：振り返りと演習（課題学習）
01/19	15. まとめと発展的話題

充足可能性問題

# 充足可能性問題

- SAT, satisfiability problem
- 与えられた命題論理式を「真」とするような、命題記号への真偽値割り当てがあるかを判定する問題. 多くの場合, その真理値割り当てを求める

例題  $(p_1 \vee p_3) \wedge (\neg p_1 \vee p_2) \wedge (\neg p_2 \vee \neg p_3) \wedge (p_1 \vee p_2 \vee \neg p_3)$

- 命題記号:  $p_1, p_2, p_3$
- $\vee$  : または ( $\parallel$ ),  $\wedge$  : かつ ( $\&\&$ ),  $\neg$  : 否定 (!)
- 求めるもの: 式を真にするための  $p_1, p_2, p_3$  への真偽値割り当て
  - 例えば, :  $p_1 = \text{true}, p_2 = \text{true}, p_3 = \text{true}$  とすると. . . 全体は偽となる

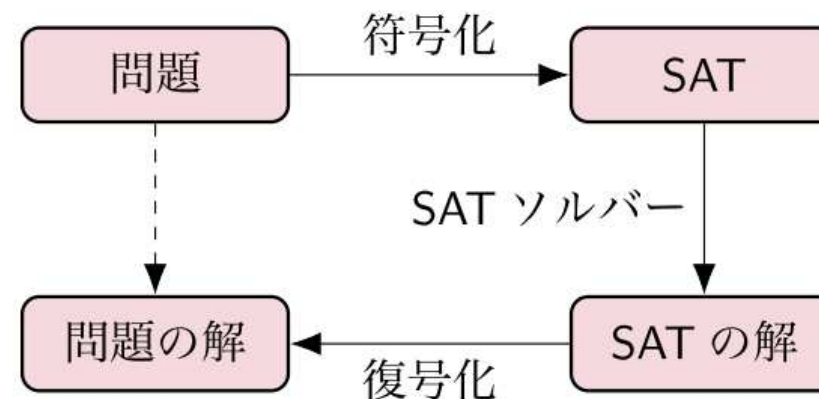
$$\begin{array}{ccccccc} & t & & t & & f & & t \\ & \underbrace{\hspace{1.5cm}} & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} \\ (p_1^t \vee p_3^t) & \wedge & (\neg p_1^t \vee p_2^t) & \wedge & (\neg p_2^t \vee \neg p_3^t) & \wedge & (p_1^t \vee p_2^t \vee \neg p_3^t) \\ & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} & & \underbrace{\hspace{1.5cm}} \\ & & f & & f & & f \end{array}$$

# 充足可能性問題 (Boolean Satisfiability Testing)

- 与えられた命題論理式を「真」にする命題変数への割り当て (= モデル) が存在するかを判定する問題
  - SATは、NP完全であることが最初に証明された問題
  - 「SAT問題は、非常に多くの問題を解くための鍵となることから、明らかにkiller appだ」(The Art of Computer Programmingの序文 by Knuth先生(チューリング賞受賞者))
  - 多くの場合、sat/unsatに加えてモデルも表示する
- 確認
  - 解釈 = 命題変数に対する真理値の割り当て
  - モデル = 論理式が真となる解釈
  - 命題論理式の分類
    - 恒真 (トートロジー) : すべての解釈で真
    - 充足可能 : 真にする解釈が存在する
    - 恒偽 (矛盾) : すべての解釈で偽
- SAT : 問題設定はシンプル
  - モデルが存在するかしないかを判定する
  - モデルが存在しない (恒偽)
    - 背理法を用いた伴意式の証明にも利用可能

# SAT型システム

- 問題を変換し、SATソルバーを用いて解くシステム
  - 符号化：問題への変換  $\longleftrightarrow$  復号化：SAT解からの変換
  - SATソルバー：SAT問題を解くソフトウェア
- 問題毎に特化したアルゴリズムを使う（作る）のではなく、SATに解いてもらう



- SATへの入力
  - 連言標準形 (CNF) = 節の連言 (AND結合) = 節集合
    - 節 (clause) : リテラルの選言 (OR結合)
    - リテラル (Literal) : 命題変数, 命題変数の否定

# SAT 型システムの成功事例

- プランニング (SATPLAN, Blackbox) [Kautz+, 1992] [▶ web](#)
- 自動テストパターン生成 [Larrabee, 1992]
- ジョブショップスケジューリング [Crawford+, 1994]
- 有界モデル検査 [Biere, 2009]
- ソフトウェア検証 (Alloy) [Jackson, 2006] [▶ web](#)
- 書換えシステム (AProVE) [Jürgen+, 2004] [▶ web](#)
- インテル社の i7 プロセッサの検証 [Kaivola+, 2009]
- Eclipse のコンポーネント間の依存解析 [Le Berre+, 2009] [▶ web](#)
- 解集合プログラミング (clasp) [Gebser+, 2012] [▶ web](#)
- Linux のパッケージマネージャである DNF の依存性解決 [▶ web](#)
- 制約充足問題 (Sugar) [Tamura+, 2009] [▶ web](#)
  - ▶ オープンショップスケジューリング問題の未解決問題の求解 [Tamura+, 2009]
  - ▶ パッキング配列問題の未解決問題の求解 [則武+, 2013]
- この他ペトリネットの検証, システム生物学, グラフ理論の問題などにも応用されている [Ogata+, 2004, Soh+, 2010, Soh+, 2014].

# SAT に関連する特に最近の話題

- 2014 年 2 月

- ▶ Erdős Discrepancy Conjecture の  $C = 2$  の場合の解決 [Konev+, 2014]

- 2015 年 12 月

- ▶ The Art of Computer Programming 最新分冊で SAT が取り上げられる [Knuth, 2015]

- 2016 年 5 月

- ▶ Boolean Pythagorean Triple 問題の解決 [Heule+, 2016]

- ★ 発表当時 Nature 誌へこの話題が掲載される ▶ web

- 2017 年 2 月

- ▶ SHA-1 の衝突メッセージ作成の過程で SAT ソルバーが使われる ▶ web



# SHA-1 ハッシュ値の衝突

- 2017 年 2 月に同一の SHA-1 (Security Hash Algorithm 1) ハッシュ値をもつ 2 つのファイルが実際に作成された。

$CV_0$	4e a9 62 69 7c 87 6e 26 74 d1 07 f0 fe c6 79 84 14 f5 bf 45
$M_1^{(1)}$	7f 46 dc 93 a6 b6 7e 01 3b 02 9a aa 1d b2 56 0b 45 ca 67 d6 88 c7 f8 4b 8c 4c 79 1f e0 2b 3d f6 14 f8 6d b1 69 09 01 c5 6b 45 c1 53 0a fe df b7 60 38 e9 72 72 2f e7 ad 72 8f 0e 49 04 e0 46 c2
$CV_1^{(1)}$	8d 64 d6 17 ff ed 53 52 eb c8 59 15 5e c7 eb 34 f3 8a 5a 7b
$M_2^{(1)}$	30 57 0f e9 d4 13 98 ab e1 2e f5 bc 94 2b e3 35 42 a4 80 2d 98 b5 d7 0f 2a 33 2e c3 7f ac 35 14 e7 4d dc 0f 2c c1 a8 74 cd 0c 78 30 5a 21 56 64 61 30 97 89 60 6b d0 bf 3f 98 cd a8 04 46 29 a1
$CV_2$	1e ac b2 5e d5 97 0d 10 f1 73 69 63 57 71 bc 3a 17 b4 8a c5

$CV_0$	4e a9 62 69 7c 87 6e 26 74 d1 07 f0 fe c6 79 84 14 f5 bf 45
$M_1^{(2)}$	73 46 dc 91 66 b6 7e 11 8f 02 9a b6 21 b2 56 0f f9 ca 67 cc a8 c7 f8 5b a8 4c 79 03 0c 2b 3d e2 18 f8 6d b3 a9 09 01 d5 df 45 c1 4f 26 fe df b3 dc 38 e9 6a c2 2f e7 bd 72 8f 0e 45 bc e0 46 d2
$CV_1^{(2)}$	8d 64 c8 21 ff ed 52 e2 eb c8 59 15 5e c7 eb 36 73 8a 5a 7b
$M_2^{(2)}$	3c 57 0f eb 14 13 98 bb 55 2e f5 a0 a8 2b e3 31 fe a4 80 37 b8 b5 d7 1f 0e 33 2e df 93 ac 35 00 eb 4d dc 0d ec c1 a8 64 79 0c 78 2c 76 21 56 60 dd 30 97 91 d0 6b d0 af 3f 98 cd a4 bc 46 29 b1
$CV_2$	1e ac b2 5e d5 97 0d 10 f1 73 69 63 57 71 bc 3a 17 b4 8a c5

実際の衝突メッセージ. [▶ web](#) より引用

- 報告したのは Google とオランダ国立数学・計算機科学研究センター (CWI) のチームで, 2 番目の near-collision ブロックペアを見つける計算の一部で SAT ソルバーが使われた。

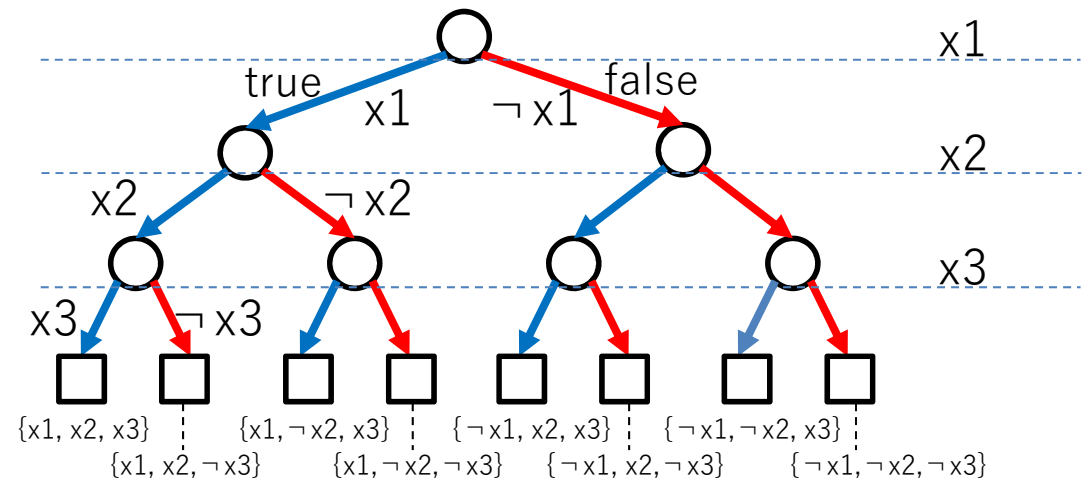
14 / 49

[https://jssst-ppl.org/workshop/2017/slides/ppl2017\\_c4\\_soh.pdf](https://jssst-ppl.org/workshop/2017/slides/ppl2017_c4_soh.pdf) より

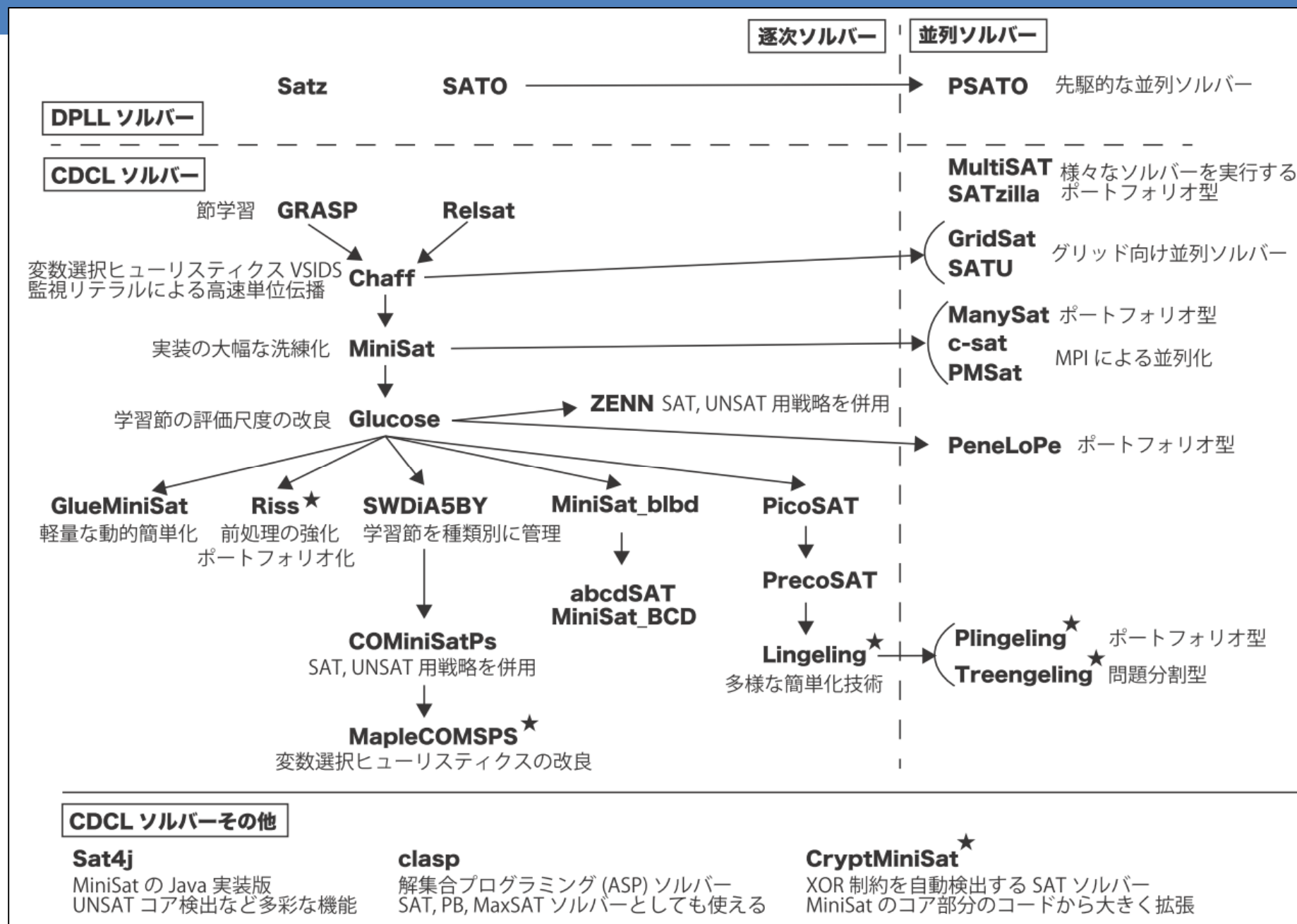
# 基本アルゴリズム

# SATの基本アルゴリズム

- 真となる割り当てを調べる：原理的には、真理値表を求める場合と同じ
  - 真理値表を表示するプログラム (TruthTable.pde) を確認してみよう
    - 各命題記号に対し、trueを割り当てる場合、falseを割り当てる場合の2通り
    - 命題記号をノード、割り当てを分岐とする二分木の深さ優先探索



- 真理値表：すべての命題変数に値を割り当てた後、解釈を表示
- SAT：モデル（真となる解釈）のみが必要
  - SAT/UNSATだけで良いなら、一つのモデルが見つかったら終了すればよい
  - モデルとならないことが分かった時点でその先の探索（割り当て）を打ち切る
  - 更なる工夫
    - 単位伝播：「必然的な真偽値割り当て」を行うことで分岐を減らす
    - 節学習：「探索中に得た情報」を利用する



宋 他, SATソルバーの最新動向と利用技術, コンピュータソフトウェア, 35(4):72-92, 2018より

# DPLL (Davis-Putnam-Logemann-Loveland)

- 二分木の深さ優先探索 + 単位伝播
  - + 早期停止 + 純粋記号ヒューリスティクス

**function** DPLL-SATISFIABLE?(*s*) **returns** *true* or *false*  
**inputs:** *s*, a sentence in propositional logic

clauses : 節集合  
symbols : 命題変数の集合  
model : (部分) 真偽値割り当て

*clauses*  $\leftarrow$  the set of clauses in the CNF representation of *s*  
*symbols*  $\leftarrow$  a list of the proposition symbols in *s*  
**return** DPLL(*clauses*, *symbols*, { })

このアルゴリズムは純粋にsat/unsatを返す  
(modelを表示すれば割り当ては分かる)

**function** DPLL(*clauses*, *symbols*, *model*) **returns** true or false

**if** every clause in *clauses* is true in *model* **then return** *true*  
**if** some clause in *clauses* is false in *model* **then return** *false* } 早期停止

*P*, *value*  $\leftarrow$  FIND-PURE-SYMBOL(*symbols*, *clauses*, *model*) 純粋記号ヒューリスティクス

**if** *P* is non-null **then return** DPLL(*clauses*, *symbols* - *P*, *model*  $\cup$  { *P*=*value* })

*P*, *value*  $\leftarrow$  FIND-UNIT-CLAUSE(*clauses*, *model*) 単位伝播

**if** *P* is non-null **then return** DPLL(*clauses*, *symbols* - *P*, *model*  $\cup$  { *P*=*value* })

*P*  $\leftarrow$  FIRST(*symbols*); *rest*  $\leftarrow$  REST(*symbols*)

**return** DPLL(*clauses*, *rest*, *model*  $\cup$  { *P*=*true* }) **or**  
DPLL(*clauses*, *rest*, *model*  $\cup$  { *P*=*false* })

二分木の深さ優先探索

## 早期停止

- 部分的に出来上がったモデルに対して真偽を検出する
- すべての変数に真偽値を割り当てる前に、SAT/UNSATが決定できる場合がある

$$\begin{array}{c} \text{すべての節が true になる必要がある} \\ \hline \text{リテラル} \\ \underbrace{(\alpha_1 \vee \dots \vee \alpha_m)}_{\text{最低一つのリテラルが true であればよい}} \wedge \dots \wedge \underbrace{(\beta_1 \vee \dots \vee \beta_n)}_{\text{節}} \end{array}$$

- SAT/UNSATの条件
  - SATであるためには、すべての節がtrueである必要がある
    - ➔節はリテラルの選言；最低一つのリテラルがtrueであれば節はtrue
  - falseとなる節があればSATにはならない
- 例： $(A \vee B) \wedge (A \vee C)$ 
  - $A = \text{true}$  とすると、 $(A \vee B)(A \vee C)$ は共にtrueとなる ➔ SATであることが確定
    - B, C への値の割り当てを行う前にSATが確定する.
    - また、B,Cの割り当ては任意でOK
  - $A = \text{false}$ ,  $B = \text{false}$  とすると、 $(A \vee B)$ はfalseとなる
    - ➔ (現在の割り当てでは)satにならないことが確定
    - Cへの値の割り当てを行う前に、SATにならないことが確定する.
    - このとき、バックトラックしてA, B の真偽値の割り当てをやり直す

# 純粹記号ヒューリスティクス

- 純粹な記号 (pure symbol) : すべての節で同じ符号を持つ命題記号
  - 現在の割り当てにおいて, trueが確定している節は無視して考える
  - 例:  $(A \vee \neg B) \wedge (\neg B \vee \neg C) \wedge (A \vee C)$  におけるAとB
    - Aは正リテラルとしてのみ現れる. Bは負リテラルとしてのみ現れる
- 「純粹な記号のリテラルをtrueにする」モデルが存在する
  - 純粹な記号のリテラルに対するtrue割り当てが節をfalseにすることはない
    - 節中の最低一つのリテラルがtrueであれば, 節自体はtrueになる
    - 純粹な記号にtrueを割り当てれば, 節がtrueとなりその節は無視することができる
  - 例:  $(A \vee \neg B) \wedge (\neg B \vee \neg C) \wedge (A \vee C)$ 
    - $A=\text{true}, B=\text{false} (\neg B=\text{true})$ を割り当てる  $\rightarrow$  すべての節がtrueになり sat
- 現在の割り当てにおいて, trueが確定している節は無視して考える
  - trueが確定している節は, 真理値未割当て変数に任意の割り当てをしてもtrueのまま
    - 既に最低一つのリテラルがtrueなので, 節がtrueになっている.
    - 残りのリテラルがtrueになってもfalseになっても, 節の真理値は変わらない
  - 例:  $B=\text{false}$ の下での  $(A \vee \neg B) \wedge (\neg B \vee \neg C) \wedge (A \vee C) \rightarrow (A \vee \neg B) \wedge (\neg B \vee \neg C) \wedge (A \vee C)$ 
    - A, Cも純粹なリテラルとなる



# 単位伝播 (unit propagation)

- 単位節 (Unit clause)
  - 一つを除いてすべてのリテラルにfalseが割り当てられている節
  - 例：B=falseにおける  $(B \vee \neg C)$
- 充足可能であるためには、すべての節がtrueである必要がある
  - 当然、単位節もtrueとなる必要がある
  - 単位節に現れる（値未割当ての）リテラルはtrueにしなければならない
    - 他のリテラルはすべてfalseなので、残ったリテラルはtrueでないと節がtrueにならない
  - ➔ 単位節中のリテラルは（自動的に）真偽値が決まる
    - 例：B=falseにおける  $(B \vee \neg C)$  なる単位節から割当てC=falseが確定
  - ➔ すべての単位節中のリテラルに、最初に値を割り当てる
    - この時点で矛盾が生じる = それまでの割り当てが不適 ➔ バックトラック
- 単位節の伝播：一つの単位節に真理値割り当てが、別の単位節を生む
  - B=falseにおける  $(B \vee \neg C)$ ,  $(C \vee A)$ 
    - 単位節  $(B \vee \neg C)$  より、C=falseを割り当てる.
    - 結果{B=false, C=false}となり、 $(C \vee A)$ も単位節となる. A=trueが自動的に決まる



# DPLL (Davis-Putnam-Logemann-Loveland)

- 二分木の深さ優先探索 + 単位伝播
  - + 早期停止 + 純粋記号ヒューリスティクス

**function** DPLL-SATISFIABLE?(*s*) **returns** *true* or *false*  
**inputs:** *s*, a sentence in propositional logic

clauses : 節集合  
 symbols : 命題変数の集合  
 model : (部分) 真偽値割り当て

*clauses*  $\leftarrow$  the set of clauses in the CNF representation of *s*  
*symbols*  $\leftarrow$  a list of the proposition symbols in *s*  
**return** DPLL(*clauses*, *symbols*, { })

このアルゴリズムは純粋にsat/unsatを返す  
 (modelを表示すれば割り当ては分かる)

**function** DPLL(*clauses*, *symbols*, *model*) **returns** true or false

**if** every clause in *clauses* is true in *model* **then return** *true*  
**if** some clause in *clauses* is false in *model* **then return** *false* } 早期停止

*P*, *value*  $\leftarrow$  FIND-PURE-SYMBOL(*symbols*, *clauses*, *model*) 純粋記号ヒューリスティクス

**if** *P* is non-null **then return** DPLL(*clauses*, *symbols* - *P*, *model*  $\cup$  { *P*=*value* })

*P*, *value*  $\leftarrow$  FIND-UNIT-CLAUSE(*clauses*, *model*) 単位伝播

**if** *P* is non-null **then return** DPLL(*clauses*, *symbols* - *P*, *model*  $\cup$  { *P*=*value* })

*P*  $\leftarrow$  FIRST(*symbols*); *rest*  $\leftarrow$  REST(*symbols*)

**return** DPLL(*clauses*, *rest*, *model*  $\cup$  { *P*=*true* }) **or**  
DPLL(*clauses*, *rest*, *model*  $\cup$  { *P*=*false* })

二分木の深さ優先探索

## DPLL (Davis-Putnam-Logemann-Loveland)

**procedure**  $DPLL(Th : \text{set of clauses})$ :

**if**  $Th$  is empty

**return** *true*

**else if**  $Th$  contains an empty clause

**return** *false*

**else if** there exists a literal  $l$  in  $Th$  such that  $\bar{l}$  does not appear in  $Th$

$Th' := Th - \{C \mid C \in Th \text{ and } C \text{ contains } l\}$

**return**  $DPLL(Th')$

**else if**  $Th$  contains a unit clause (a clause with one literal  $l$ )

$Th' := \{C - \{\bar{l}\} \mid C \in Th \text{ and } C \text{ does not contain } l\}$

**return**  $DPLL(Th')$

**else** choose a proposition  $l$  in  $Th$

$Th_t := \{C - \{\bar{l}\} \mid C \in Th \text{ and } C \text{ does not contain } l\}$

$Th_f := \{C - \{l\} \mid C \in Th \text{ and } C \text{ does not contain } \bar{l}\}$

**return**  $DPLL(Th_t) \vee DPLL(Th_f)$

$Th$  : 節集合

$C$  : 節 (= リテラル集合)

$l$ にtrueを割り当てる。  
 $l$ を含む節はtrueとなるので、  
以降考慮する必要はない

$l$ はtrue. 従って  $l$ を含む節もtrueで無視できる  
一方,  $\neg l$ はfalse.  
以降  $\neg l$ は,  $\neg l$ を含む節のtrue,falseに影響なし

リテラル  $l$ をfalseを割当て.  
 $\neg l$ を含む節はtrueとなる.  
 $l$ はfalse.  $l$ を含む節の真理値に影響なし

## DPLL (Davis-Putnam-Logemann-Loveland)

**DPLL**(CNF  $\psi$ )

**begin**

if  $\psi$  is empty **then** return SAT;

$\psi := \text{UnitPropagation}(\psi)$ ;

if  $\square$  exists in  $\psi$  **then** return UNSAT;

Choose variable  $x$  in  $\psi$  by some hueristics;

if **DPLL**( $\psi \wedge x$ ) returns SAT **then** return SAT; ←  $x$ にtrueを割り当てる

else return the result of **DPLL**( $\psi \wedge \bar{x}$ ) ←  $x$ にfalseを割り当てる

**end**

図 1 DPLL algorithm

**UnitPropagation**(CNF  $\psi$ )

**begin**

**while**  $\square$  doesn't exist and a unit clause  $l$  exists in  $\psi$  **do**

Assign 1 to  $l$  and simplify  $\psi$ ;

return  $\psi$

**end**

simplify :

- (1)  $\psi$  から, 「trueが確定した節」 を除去
- (2) 各節から, 「 $\neg l$ 」 を除去

# CDCL (Conflict Driven Clause Learning)

- 矛盾からの節学習
  - 矛盾が生じたときに、その「原因」を解析する.
  - 「原因」を否定した節を論理式に追加する.
- 例 :  $(x1 \vee x2), (\neg x2 \vee \neg x3 \vee \neg x4), (x1 \vee x4), (\neg x2 \vee x3 \vee \neg x4)$ 
  - $x2 = \text{true}, x1 = \text{true}, x4 = \text{true}$  の場合を考える.
  - $(\neg x2 \vee \neg x3 \vee \neg x4)$  と  $(\neg x2 \vee x3 \vee \neg x4)$  は同時には true に出来ない
    - $(\text{false} \vee \neg x3 \vee \text{false})$  と  $(\text{false} \vee x3 \vee \text{false})$  なので,  $x3$  を true にしても false にしてもだめ
  - 原因 :  $x2$  と  $x4$  を同時に true にしたこと.  $(x2 \wedge x4)$  が原因
  - 原因の否定を追加 :  $\neg (x2 \wedge x4) \rightarrow (\neg x2 \vee \neg x4)$  を追加する
    - これにより,  $x2$  を true としたとき,  $x4$  の false が確定 (単位伝播)
- 矛盾の解析 : 含意グラフ (単位伝播による含意関係を表すグラフ) の分析
  - 詳細は「鍋島英知, 宋剛秀 : 高速SATソルバーの原理, 人工知能学会誌, 25(1):68-76, 2010」参照

# 確率的ソルバーとSATの拡張

## 確率的ソルバー (stochastic solver)

- 系統的ソルバー：系統的探索を行う完全なアルゴリズムに基づくソルバー
  - DPLLなど
  - 充足可能・不能を判定可能
- 確率的ソルバー：確率的局所探索を行う不完全なアルゴリズムに基づく
  - WalkSatなど
  - 充足可能性は判定可能／充足不能性は一般に判断できない（その分高速）
- WalkSat：確率的局所探索
  - 具体的なアルゴリズムは次ページ
  - 局所探索：現在の割り当てと一ヶ所だけが異なる割り当てを考える
  - 確率的：ランダムに、割り当てを変更する命題記号を選択する
  - 繰り返し上限を $\infty$ にすると、充足可能な場合は必ずSATと判定できる
  - 様々な変種が考えられる

# WalkSat

S. Russell, P. Norvig 著, 古川康一監訳: エージェントアプローチ人工知能, 7章より

**function** WALKSAT(*clauses*, *p*, *max\_flips*) **returns** a satisfying model or *failure*

**inputs:** *clauses*, a set of clauses in propositional logic

*p*, the probability of choosing to do a “random walk” move, typically around 0.5

*max\_flips*, number of value flips allowed before giving up

*model*  $\leftarrow$  a random assignment of *true/false* to the symbols in *clauses*

ランダム割当てでスタート

**for each** *i* = 1 **to** *max\_flips* **do**  $\leftarrow$  繰り返しの上限数を与える

**if** *model* satisfies *clauses* **then return** *model*

*clause*  $\leftarrow$  a randomly selected clause from *clauses* that is false in *model*

false節の選択

**if** RANDOM(0, 1)  $\leq p$  **then**

ランダムウォーク

flip the value in *model* of a randomly selected symbol from *clause*

**else** flip whichever symbol in *clause* maximizes the number of satisfied clauses

**return** *failure*

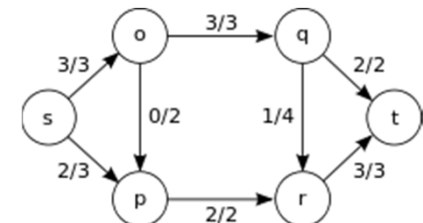
制約違反最小化

- 命題記号に対するランダムな真偽値割り当てからスタート
- 繰り返し上限に達する or モデルが見つかるまで 以下を繰り返す
  - falseである節をランダムに選択
  - 確率 $p$ でランダムウォーク
    - 「節中の命題記号をランダムに選択し, その真偽値を反転する」
  - 確率 $(1-p)$ で制約違反最小化
    - 「節中の命題記号の内, 『反転することでtrueとなる節が最大となる命題記号』の真偽値を反転する」



# SATの発展：MaxSat (Maximal satisfiability)

- SATを最適化問題に拡張したもの
- モデルに優劣をつけ、最適なモデルを出力する
  - 元のSATではモデルの優劣は考えない
- SATはすべての節を真にすることを要求する（例外を許さない）
- MaxSatでは、ハード節とソフト節を考える
  - ソフト節：満たさなくても良い節の集合. 重みを用いて重要性を表す
  - ハード節：真とならなければいけない節の集合. 重みはソフト節の最大値よりも大きい
- 最適解
  - すべてのハード節を満たし、満たされるソフト節の重みの総和を最大にする割り当て
- 多岐の応用
  - スケジューリング, プラニング, ゲーム理論, ルーティング, バイオインフォマティクス, ハードウェア・ソフトウェアのデバッグ, など
    - 最大フロー問題：単一の始点から終点へのフローネットワークで最大となるフローを求める問題





演習：SATソルバーを動かしてみよう

## SATソルバーを動かしてみよう

- clingo : 解集合プログラミングシステム
  - <https://github.com/potassco/clingo/releases/>
  - gringo : グラウンダー (変数の基礎化)
  - claps : ソルバ (SATソルバーとしても利用可能)

- 一回目資料より. . .

### 【演習環境】

- レポートは, Latexを用いて作成しPDFファイルを提出すること
- 一部の例題に Processing プログラムを用いる
- SAT演習にはclasp, ASP演習にはclingo, ILP演習にはILASPを用いる
  - 参考: <https://doc.ilasp.com/installation.html> ですべてインストール可能
    - 管理者として実行しましょう
  - Ubuntu on VirtualBox / WSL2 / Mac のいずれかを利用する

# SATソルバーを動かしてみよう

- 入力表現：DIMACS CNF

- <http://www.cs.ubc.ca/~hoos/SATLIB/Benchmarks/SAT/satformat.ps>

- 先頭行： p cnf #ofN #ofC ; #ofNは命題変数の数, #ofCは節の数

- 各行：節 ; 節は0で終わる. 各リテラルは正整数,  $\neg$ は-で表現

- ; (セミコロン) ; コメントアウト

p cnf 3 4	; 命題変数の数_節の数
1 2 3 0	; $p_1 \vee p_2 \vee p_3$
-1 -2 0	; $\neg p_1 \vee \neg p_2$
-1 -3 0	; $\neg p_1 \vee \neg p_3$
-2 -3 0	; $\neg p_2 \vee \neg p_3$

- 実行方法：

- \$ ./clasp [オプション] ファイル名

- オプションなしだと, 最初に見つけた解を表示

- オプション位置に“0”を入れるとすべての解を表示

- 試してみよう

1. 右上のCNF

2.  $(x_1 \vee x_2) \wedge (\neg x_2 \vee \neg x_3 \vee \neg x_4) \wedge (x_1 \vee x_4) \wedge (\neg x_2 \vee x_3 \vee \neg x_4)$

3.  $(p_1 \vee p_3) \wedge (\neg p_1 \vee p_2) \wedge (\neg p_2 \vee \neg p_3) \wedge (p_1 \vee p_2 \vee \neg p_3)$

## SAT符号化して問題を解いてみよう

入試問題：2016年度青山学院大学(全学部日程)

- A, B, Cの3名がいて、正直者が2人、残りの1人が嘘つきである.
- そして3名とも誰が正直者で、誰が嘘つきかは知っているとする.
- ここで、正直者とは常に真実をいう人、嘘つきとは常に真実と反対のことをいう人である.
- このとき、つぎのようなA, B, Cの証言が得られた.
  - Aの証言：Cは嘘つきである.
  - Bの証言：Aは正直者である.
  - Cの証言：Bは嘘つきである.
- 誰が嘘つきかを決定しよう.

何を命題変数にしますか？  
「嘘つきは一人」をどう表しますか？

今回はSAT符号化という大げさなものではなく、単なる命題論理表現をCNFに変換する

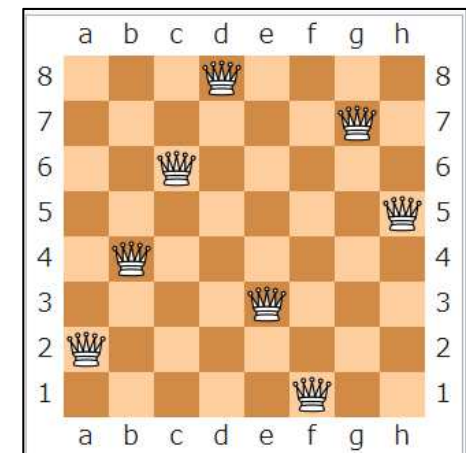
## SAT符号化して問題を解いてみよう(1)

### 命題論理 (CNF) で表現してみよう

- 誰が嘘つきかを決定しよう
  - ➔ 「嘘つき」なら真, (反対の) 「正直者」なら偽を取る命題変数  
 $L\_A$ : Aは嘘つきである /  $L\_B$ : Bは嘘つきである /  $L\_C$ : Cは嘘つきである
- A, B, Cの3名がいて, 正直者が2人, 残りの1人が嘘つきである.
  - ➔ 誰か一人は嘘つき:  $(L\_A \vee L\_B \vee L\_C)$
  - ➔ 同時に2名が嘘つきにはならない
    - ➔ AとBが同時に嘘つきではない:  $\neg (L\_A \wedge L\_B)$  より  $(\neg L\_A \vee \neg L\_B)$
    - ➔ BとCが同時に嘘つきではない:  $\neg (L\_B \wedge L\_C)$  より  $(\neg L\_B \vee \neg L\_C)$
    - ➔ CとAが同時に嘘つきではない:  $\neg (L\_C \wedge L\_A)$  より  $(\neg L\_C \vee \neg L\_A)$
- Aの証言: Cは嘘つきである
  - ➔ Aが正直者  $\Leftrightarrow$  Cは嘘つき:  $\neg L\_A \Leftrightarrow L\_C$  より  $(L\_A \vee L\_C) \wedge (\neg L\_A \vee \neg L\_C)$
  - ➔ Aが嘘つき  $\Leftrightarrow$  Cは正直者:  $L\_A \Leftrightarrow \neg L\_C$  より  $(L\_A \vee L\_C) \wedge (\neg L\_A \vee \neg L\_C)$
- Bの証言: Aは正直者である.
  - ➔ Bが正直者  $\Leftrightarrow$  Aは正直者:  $\neg L\_B \Leftrightarrow \neg L\_A$  より  $(L\_B \vee \neg L\_A) \wedge (L\_A \vee \neg L\_B)$
- Cの証言: Bは嘘つきである.
  - ➔ Cが正直者  $\Leftrightarrow$  Bは嘘つき:  $\neg L\_C \Leftrightarrow L\_B$  より  $(L\_C \vee L\_B) \wedge (\neg L\_C \vee \neg L\_B)$
- 動かしてみよう: SAT/Lair\_or\_honest/ Liar\_or\_honest.cnf

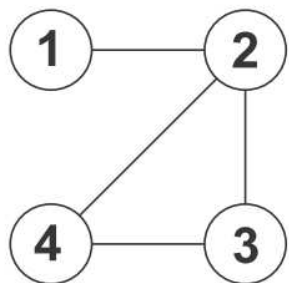
### N人の女王

- $n$  個のクイーンを,  $n \times n$  のチェス盤に, お互いに取りられないように並べる
- SAT符号化
  - 命題記号:  $q[i, j]$  「 $i$ 行 $j$ 列にクイーンがある」
  - 制約1: 各行でクイーンは一つ
    - $(q[1, 1] \vee \dots \vee q[1, n]) \wedge \dots (q[n, 1] \vee \dots \vee q[n, n])$
    - $(\neg q[1, 1] \vee \neg q[1, 2]) \wedge (\neg q[1, n-1] \vee \neg q[1, n]) \wedge \dots \wedge (\neg q[n, 1] \vee \neg q[n, 2]) \wedge (\neg q[n, n-1] \vee \neg q[n, n])$
  - 制約2: 各列でクイーンの重複はNG
    - $(\neg q[1, 1] \vee \neg q[2, 1]) \wedge (\neg q[n-1, 1] \vee \neg q[n, 1]) \wedge \dots \wedge (\neg q[1, n] \vee \neg q[2, n]) \wedge (\neg q[n-1, n] \vee \neg q[n, n])$
  - 制約3: 斜めでクイーンの重複はNG
    - $(\neg q[i, j] \vee \neg q[i+k, j \pm k])$  マス  $(i, j)$  の右 (左) 斜め下
- 動かしてみよう: SAT/nQueen/queen\_8.cnf (N=8クイーン)



## グラフの頂点彩色

- 隣接する頂点同士が同じ色にならないように全頂点を彩色する
  - どんな（平面）グラフも，4色で塗り分けることができる
- SAT符号化（色の数をcとする）
  - 命題記号： $p_{\{i, k\}}$  「頂点  $i$  の色は  $k$  である」
  - 制約1：各頂点の色は一つ
    - 各頂点の色は， $j = 1 \cdots c$  のいずれか．  $(p_{\{i,1\}} \vee \cdots \vee p_{\{i,c\}})$
    - $p_{\{i, k_1\}}$  と  $p_{\{i, k_2\}}$  は同時に成り立たない．
      - $(\neg p_{\{i, 1\}} \vee \neg p_{\{i, 2\}}) \wedge \cdots \wedge (\neg p_{\{i, c-1\}} \vee \neg p_{\{i, c\}})$
  - 制約2：隣接する頂点は異なる色
    - 隣接頂点  $(i, j)$  が同時に色  $k$  になることはない
      - $(\neg p_{\{i, 1\}} \vee \neg p_{\{j, 1\}}) \wedge \cdots \wedge (\neg p_{\{i, c\}} \vee \neg p_{\{j, c\}})$



3色で塗り分ける

$$\begin{aligned}
 &(\neg p_{1,1} \vee \neg p_{2,1}) \wedge (\neg p_{2,1} \vee \neg p_{3,1}) \wedge (\neg p_{2,1} \vee \neg p_{4,1}) \wedge (\neg p_{3,1} \vee \neg p_{4,1}) \wedge \\
 &(\neg p_{1,2} \vee \neg p_{2,2}) \wedge (\neg p_{2,2} \vee \neg p_{3,2}) \wedge (\neg p_{2,2} \vee \neg p_{4,2}) \wedge (\neg p_{3,2} \vee \neg p_{4,2}) \wedge \\
 &(\neg p_{1,3} \vee \neg p_{2,3}) \wedge (\neg p_{2,3} \vee \neg p_{3,3}) \wedge (\neg p_{2,3} \vee \neg p_{4,3}) \wedge (\neg p_{3,3} \vee \neg p_{4,3}) \wedge \\
 &(p_{1,1} \vee p_{1,2} \vee p_{1,3}) \wedge (p_{2,1} \vee p_{2,2} \vee p_{2,3}) \wedge \\
 &(p_{3,1} \vee p_{3,2} \vee p_{3,3}) \wedge (p_{4,1} \vee p_{4,2} \vee p_{4,3}) \wedge \\
 &(\neg p_{1,1} \vee \neg p_{1,2}) \wedge (\neg p_{1,1} \vee \neg p_{1,3}) \wedge (\neg p_{1,2} \vee \neg p_{1,3}) \wedge \\
 &(\neg p_{2,1} \vee \neg p_{2,2}) \wedge (\neg p_{2,1} \vee \neg p_{2,3}) \wedge (\neg p_{2,2} \vee \neg p_{2,3}) \wedge \\
 &(\neg p_{3,1} \vee \neg p_{3,2}) \wedge (\neg p_{3,1} \vee \neg p_{3,3}) \wedge (\neg p_{3,2} \vee \neg p_{3,3}) \wedge \\
 &(\neg p_{4,1} \vee \neg p_{4,2}) \wedge (\neg p_{4,1} \vee \neg p_{4,3}) \wedge (\neg p_{4,2} \vee \neg p_{4,3})
 \end{aligned}$$

動かしてみよう：

SAT/GraphColoring/sample\_graph.cnf

## 数独, ナンバーリンク

- 以下の記事を読んで, 自分で作成してみよう
- 田村他「SATとパズル –問題をいかにSATソルバーで解くか–」情報処理, 57(8):710-715, 2016
  - [https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/index.php?active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&page\\_id=13&block\\_id=8&item\\_id=169443&item\\_no=1](https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=8&item_id=169443&item_no=1)



# 目次：今回の授業の内容

- 充足可能性問題
  - 定義・応用例・SAT型システム
  - 系統的ソルバーの基本アルゴリズム
    - 二分探索・DPLL・CDCL
  - 確率的ソルバー
  - SATの拡張
    - MaxSAT
- SATソルバを動かしてみよう
  - clasp
  - 簡単な例題
  - より現実的な例題